龍とダブった！？

蜘蛛の生糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍とダブった！？

【Ｎコード】
Ｎ５４７１Ｌ

【作者名】
蜘蛛の生糸

【あらすじ】
無気力に生きていた一介の高校生の俺が、突然異世界に召喚される。その世界は魔法使いがいっぱい迫害されてて、しかも俺の身体に龍の魂が宿っているらしい。
……正直言ってあまり居心地がよろしくない。だって、龍を狙う女の英雄とか龍を利用しようとする輩がいるんだもの。
それで、この現象の解決策を探して三千里することにしたんだ。

―1―　話を聞け（前書き）

この小説は作者の精一杯の独断と偏見と努力で出来ています。比率は言えません。

それでも良い、むしろそれが良い！という方はどうか読んでやってくれると喜びます。お願いします。

―1―　話を聞け

――いつも通りの毎日

『いつも通り』の定義は人それぞれであり、夕飯が違うだけで日常に変化を感じる人もいれば、何が起こっても全て『いつも通り』で済ます人もいる。

俺はおそらく後者なのだろうが、まぁそんなことはどうでもいい。

とにかく俺は、朝食を摂って学校に行って、帰って夕飯を摂る。少なくともそれはしばらく変わらないと思っていた。

そしてある程度未来を選択することの出来るこの世の中、それは決めた道をただ歩いていくだけ。そんな風に生きてなんなのかと、つまるところそんな人生に意味を見出だすことが出来ないでいた。

学生の身分で何を考えているのかと自分でも馬鹿馬鹿しいとは思うが、それでも考えずにはいられなかった。

やがて、俺は世界のあらゆることに関して『面倒だ』と感じるようになった。

――俺は、ただの『面倒臭がり』になった。

〜〜〜

「……？」

数秒前まで、鬱陶しい友達の話に適当に相槌を打っていた。ような気がする。

つまり、学校にいた。昼休みになって学食に行く途中で友達に会い、一緒に行くはずだった。ような気がする。

――なのに、なんで周りは森なんだろう？

――なんで目の前に甲冑を身につけた人が沢山いるんだろう？

――なんで俺の後ろに気絶した女の子がいるんだろう？

うん、全くもって分からない。何一つ理由が思い浮かばない。日頃の行いか？確かに宿題はほぼ全て出していなかったけれど、テストの点数じゃカバーしたことにはならなかったのか。

ってよく見れば一人の兵士っぽいのが剣を振り回しながら走ってくるではないか。

「……はっ！？いやいや意味分からんし！え！？は！？」

予想通りに俺に向けて剣が振り下ろされる。…初対面で人を殺そうとするか普通！？

咄嗟に左腕で受け止める。

肉が裂かれる血が吹き出る。熱い熱い。……冗談じゃねぇ！服が腕が血が大変なことになっている！

「いってぇっ！」

「うぉぉおお！！」

何を叫んでるんだこのイカレ野郎は！まさか本気か！？本気で初対面の相手を殺そうとしているのか！？

「おい待て馬鹿！話を――」

「おおぉぉ！！」

――ザシュゥッ！

「いっ！！！」

左腕が！左腕から鮮血がぁっ！

ってこれマジでヤバいんじゃないか！？絶対殺す気だ！

「待て！待てよ！お――」

――ザクッ！

首を狙われた。左手で掴む。……首？今首だった！左手で掴んでいなかったら死んでた！ってああ！左手が！俺の左腕パーツが破損する！再起不能になったらどうしてくれる！

とにかくコイツの動きを止めないと……冷静になれば少しは話も通じるはずだろ。通じなくても攻撃に出ないと間違いなく殺される！

「くぁっ！てめぇぇえ！」

左手を刃から離さずに右腕を首に巻く。そしてすぐに足を払う。

「うるぁぁぁああ！！」

決まった。よし、後は冷静に俺は敵でないことを訴えるだけ！これで――

――ドドドドッ

「っづづづづ！？」

矢が刺さった。……いや嘘だろ、弓矢？生身の高校生相手に甲冑装備で斬り掛かって、隙が出来たら弓矢で射る？どこまで容赦無いんだよ……

……こんな、明らかに一方的かつ極めて冷酷に、俺は殺されるのか。

「ハハハ……」

笑えてくる。こんな理不尽があるか？突然見知らぬ場所に立って、何も分からぬままに、話も聞いてもらえずに死ぬ？

ハハハ！力が入らねぇ！座り込んで立ち上がれねぇ！腕が上がらねぇ！顔も上がらねぇ！

――チャッ

こんなになってもやっぱり容赦無いのか……戦意喪失しても話を聞く気は無いのか……

話くらい、聞いてもいいじゃねぇか。

理不尽過ぎるんだよ畜生め。

――ガッ

「っ！？」

「あーあ、左腕、どうしてくれんだよ」

俺らしかり親しかり先生しかり、話を聞かない人間が嫌いなのは全人類共通だと思うんだ。

「決めた。説得止めだ。俺は死ぬ」

この場合、最終的にはキレるしかないじゃないか？そうだろうそうに違いない。

「だけど、てめぇはぶん殴る」

「きっ、貴様っ！」

左手で掴んでいた刃が抜かれる。左手の痛覚なんてもう既に吹っ飛んだ。

立ち上がれる！もう一度左腕を犠牲にする！唯一見える肌色――顔面を……

「死ねやゴルァ！」

――ゴッ―

「ぶっ！」

倒れたコイツに怒りの鉄拳をー！

「人のっ！」

――ゴッ！

「ぶぅっ！」

「話をっ！」

――ゴッ！！

「ガッ！…は！」

「聞けやぁぁあああ！！」

――ドガッ！！！

「……」

気絶した……？じゃあ次はさっき矢を射った奴らを……

「……あー…ダルっ」

気付けば弓を構えた奴が複数いやがる。これ以上頑張れないなぁ……面倒臭すぎる。

「……？」

「諦めましたー。どうぞ殺しなさーい」

手を挙げれば捕虜とかにしてくれるかな？そうだったら頑張った甲斐があるんだけど。
……そりゃ無いか。

――ドドドッ

「っつ……チキショー、いてぇ」

でも頭に矢を射られるのは怖い。反射でまた左腕に犠牲になってもらった。そろそろ貫通ダメージとかくるんじゃないか？
それよりも人って何本矢が刺さると死ぬんだ？もう七本なんだが。

……死んだ振りすりゃ良かったかな？

あー、血を吸って制服が重い。
左腕の傷は自分でも見たくない。というか意識したら痛み始めた。熱い、痛い。
右腕には傷が無い。矢が二本刺さってるくらい、あと拳がジンジンするだけ。あれ、二本刺さってる『だけ』？んなアホな。
あとは背中に三本横腹に一本。横腹痛いよガチで。

……ハッハッハッハッハ。あと何本で死ぬかな、俺。

――ジュッ

「な、何だ！！？」

いや、こっちが聞きたい。今の紅い閃光って……もしかしなくても

「……え？レーザー？」

んなアホな。

レーザーって言うのは空想の産物であり、現代男子の夢じゃ……

ちなみにロマンはドリル。これは譲らないぜ。

「ちっ！分が悪いっ！退くぞ！！」

あ……助かった……？

とにかく、今レーザー（？）で助けてくれた（未確定）女の子（妄想）は誰だ？

「そこの少年！大丈夫か――って……大丈夫か？本当に」

「ああ、今レーザーで助けてくれたのはあんたか？」

「まぁ、うん……それよりも傷、遠目じゃ気付かなかったけど大丈夫か？矢が……」

どうやらこの紅い髪を揺らす女の子（現実）がレーザー（らしい）で助けてくれた（確定）らしい。

「実は刺さってないんだなこれが」

「ええっ！って重傷なのは流石に見れば分かる。……歩けるか？」

「……多分」

頭がボーッとする。
血が足りないんだろうな。
「……それよりも、そっちに女の子がいるんだけど」
気絶した少女を指して言う。このまま置いていくんだったら担いでやる。右腕と両足はまさかの無傷だしな。……おっとそういえば矢が二本あったか。いやぁ、参った。
「ちょっと待っててくれ」
紅い髪の彼女は気絶した少女の前でしゃがみ、手をかざす。
すると手の平から一瞬光が溢れたように見えた。んなアホな。
そして手を下げて様子を見る。
見ると少女の髪は金色だった。
「……う」
「あ、起きたかい？」
「あー…、……（ペコッ）」
少女は周りを見渡した後、目の前の彼女を見て頷く。
目が半眼なので冷静なのか寝ぼけているのか判断がつかないな。
一体どっちなんだろう？
「立てるかい？」
「立てる」

かと思うと、次にはやけにハッキリとした声で返事をした。やはり冷静なのだろうか？いやここは敢えて寝ぼけていることにしよう。意味は無いけどな。

「……あ、貴方…」

「……え、俺？」

見つめていたのを不信に思ったのだろうか。だとしたら第一印象最悪じゃないか、どうにか誤解を――

「貴方が……黒龍？」

「は？黒龍？どうして俺が――」

「っ！！？」

紅い髪の彼女が突然俺と距離を取って手をこちらに向ける。謎ばっかり増えて俺はもう泣きそうだ。

「いやいや待て待て！！違うから！俺はただの人間だから！黒龍なんて大層なもんじゃ決してないから！」

「……え？……人…間？」

「何故そこで不思議な顔をする！？どう見ても龍より人間に見えるだろ！？」

「くっ……！おい君！まさか召喚したのか！？」

「召喚っ！？待て、説明を」

「貴様じゃないっ！そこの女の子に聞いている！」

どうやら金髪の少女に聞いたようだった。

その少女はふらつきながら立ち上がっている最中だったが。

「……確かに黒龍を喚んだ感覚があった……」

「ならば何故結界を解いた！？」

「解いた筈は無い……リミッターもかかっている」

「ちっ…！何がどうなっているんだ！？」

俺が聞きたい。

まぁ言ったところで状況は変わらないんだろうけど。

そんなことより叫ばないで欲しい。血の足りない頭に響く。

そこで金髪の少女が助け舟を出してくれた。

「でも、もし黒龍だったら私達はもう死んでいる」

「それは……！……確かに、その通りだな…」

紅い髪の彼女があっさり警戒を解く。

もう半分以上諦めたが、出来るならもう少し分かりやすくお願いしたい。深く考えると意識が混濁しそうになる。

「それで……結局貴方は何？」

金髪の少女がふらついた足取りで近寄ってくる。
「あのさ……人間以外何に見えるよ？」
「……悪魔かもしれない」
「それじゃあ言わせてもらう。俺は正真正銘、人間だ」
「……そう」
何か腑に落ちないのか、それからは俺の左腕をじっと見つめている。まさか人間なら死ぬ筈だとか言われるのか？反論のしようがねぇなそれは。
「そうか、そういえば人間じゃないとあの結界は通れなかったな。……いやぁ！悪かったな！」
「はぁ、分かってくれたようで安心しましたー」
紅い髪の彼女が手の平を返したように話しかけてくる。
殺されなかっただけマシかと思った俺はもうすぐ悟りを開けるんじゃないだろうか？
「なんだその返事は？今にも死にそうな声だぞ？はっはっは」
「……いや、あんまり笑い事じゃないような気が――」
――フラリ

「へ？」

静寂。

ゆっくり倒れるのは重傷らしいが、まさにそれだろう。

目の前の彼女が反射で支えることも出来ずに、ゆっくりと倒れる。

「……重い」

それでも金髪の少女は、咄嗟に俺の傍に寄って前のめりに倒れる俺の身体を支えようとした。

しかし足に力が入らないのか、尻餅をついてしまう。

結果的に、いたいけな少女に抱き着く構図になった。

「……悪い、血まみれだ」

「いい。……でも思ったより気持ち悪い。それに割と暖かい」

血がほどよく糊状（のり）になっててべっちゃべちゃしている。暖かいのであれば尚気持ち悪いだろう。

……冷たくてもそれはそれで気持ち悪そうなのだが。

「ん？ええっ？あ、えと…ナイス！ナイス君！」

突然の出来事についていけなかった紅い髪の彼女をわき目に、俺の意識はブラックアウトした。

―1―　話を聞け（後書き）

……ここまで見た方は次も見てね！
さもないと私は……おや誰か来たようだ。

―2―　危険人物（前書き）

この小説の更新日は土日です。
できれば土日のどちらも更新しようと思っていますが、用事が入ったりすると一回だけになったりします。

―2― 危険人物

「……」

木造建築。

完全に有機物で出来た屋根、床、壁。

こんな場所、現代じゃ滅多に無い。幸運だな俺。

で、何でここにいるんだ？俺は。

「……うわぁ」

左腕を見ると全部思い出した。ついでに痛みも思い出した。全身が唸りを上げているっ。

「……動けるの？」

「動くと痛い、つまり動ける？……ってうおっ」

金髪の少女が無表情でこっちを見ている。

いきなり現れるなよ。なんだか不意打ち食らったみたいで負けた気分だ。

「……？」

「いや、何でもない……」

布団で俺は寝ていて、傍に彼女がいる。…この『彼女』っていう

のが違う意味だったらなぁ、とかは思わない。

「いいなら、質問。貴方は、どこから来たの？」

「……日本」

「？……二本？」

会話に齟齬が生じた気がする。というか多分ここは異世界というやつなんだろうし、説明するだけ無駄か。面倒臭いなぁ。

「まぁそれはいいとして、ここは何処だ？」

「？……名前は無い。ただの集落」

そう言って彼女は立ち上がる。

ただの集落っていうか、集落って具体的になんだろう？人が住んでるくらいしか分からんのだが。

「助けてくれてありがとう。今のはお礼」

「今のって……ああ、看病のことか。君がやってくれたのか、ありがとう」

「……礼はいらない。というよりするべきじゃない。私はここまでしか出来なかった。命の恩人に」

どういう意味だ？どうもハッキリしない。……まぁいいか、どうにかなるだろ。

そのまま彼女は戸を開けて出て行くときに一言。

「来て」

なんだ？今一瞬憐れみの目で見られた気がした。

また良くないことが起こるのか？この間死にかけたときに頭回転させたから、しばらく思考を放棄したいんだけどなぁ。

とは言え、そのまま寝るとどやされそうだし、まぁいいか。

「いてて……」

立ち上がって自分の格好を見ると、上半身が包帯だらけだった。下半身は制服だ。

それにしてもこの左腕。よく動けるなぁ。なんか化膿してる気がしないでもないけど。

〜〜〜

「……は？」

「ですから、召喚されたにも関わらず主の持つ権限をことごとく回避し、得体の知れない貴方を我々は危険だと判断しました」

「あぁ、それは分かった。んで？」

「数多の危険をはらむ貴方をこの世に生かしてはいけない、と判断し、これより我々は貴方を殺します」

「……殺す？」

「はい」

「俺の話は聞いてくれたりしないのか？」

「貴方の話を誰が信じましょうか？これは総意です。覆ることはありません」

「じゃあこの包帯は……？」

「同志を助けてくれたお礼です。せめて覚悟の時間をと思いまして」

嗚呼―世界は今日も腐ってやがる。

「ちなみに逃げようとしても無駄です。村の周辺に結界を張っていますので。貴方が生きる道は、ありません」

目の前の青い髪の、二十代後半だろうか、その女はムカつくくらい落ち着いた声色で言う。

もうやだ、思考は放棄したいんだよ俺は。こんな面倒くせぇ集団に関わりたく無いんだよ。ああうぜぇ。

女の後ろに多くの女がいる。全員魔法使いというやつなんだろうか、それっぽい服装の人しかいない。

「では、覚悟は宜しいですか？」

その声を無視して辺りを見回していると、あの金髪の少女と目があった。

……そんな目するんだったら助けてくれよ。まぁいいけどね、鬼ごっこは小さいころ好きだったし。でも飛び道具は卑怯だと思うが。

「脱兎って知ってるか？」

「……？」

「兎って逃げ足速いんだぜ？小屋の中でも捕まえるのに苦労するんだ」

「は？……ああ、つまり貴方は兎の妖怪だったのですか？」

「いや、そういう訳じゃ無いんだが……」

まぁ俺は兎じゃないし、逃げ足速いわけじゃない。なんか言ってみたくなっただけである、衝動的に。

「逃げるのなら射止めます。逃げないのならこの場で殺します。どうしますか？」

そりゃもちろん後者だろ。どっちにしても死ぬんだから。出来るだけ面倒じゃないほうへ。

その女が手の平をこちらに向ける。

「それで、先程の会話にはどのような打算が？」

「いや、純粋に話を引き延ばそうとしただけだ。他意は無い」

「そうですか」

「それと会話の感想なんだが、正直あんたとは噛み合わないな。間違いない」

「そうですね。私も貴方のような存在は在ってはならないと思っています」

「憶測だろ。俺はしがない人間だっての」

「果たして本当でしょうかね？」

ああ、無駄だ。この人には何を言っても聞いてくれない。人の話はもっとちゃんと聞きやがれ。

「ダルい。殺せよ」

この一撃を避けれたら逃げる。そう決めた。
女の手の平から青い光がほとばしる。
もしかして、レーザーか？当たったら死ぬじゃないか。こう、腕の向きから軌道を読んで……あ、なんか面倒に――

――ギュガガガガッ！！

背後から風の咆哮が聞こえた。
竜巻に巻かれた車が目の前の民家に激突したような衝撃が走る。
ここ最近意味不明な状況が普通になってないか？マジで困る。

「なっ！？」

慌てた女はその音源に向かって光を放つ。それは目で追うには些か人間には無理な速度で空間を横断する。
どうせ当たらないだろ。と思っていたが、予想は裏切られた。
パシィッと小気味のよい音を放ち、青い光は爆ぜたのだ。そういう魔法なのかな。というかやっぱりこれって魔法なんだろうなぁ。

「な……っ！？」

放った本人が驚愕に目を見開いている。どうやらそういうものじゃなかったようだ。
だとすれば、今のレーザーは弾かれたのだろう。相手は人外の生物みたいだな。

「誰ですか、貴女は？」

一瞬俺に聞いたのかと思ったが、人外さんに聞いたようだ。
その人外さんは身の丈程の剣を両手で持って、ずんずん歩いてくる。
ってあれぇ？人の形してやがる。

「誰かと聞いてるんです！」

二発三発と撃ち込む。今それが効かないことは証明されたのだから、戦法くらい変えるべきじゃないのか？

――パシッパシィッ

人外さん（見た目は人だが）はそれを大振りで捉える。身体を回転させたり、宙返りしたり、もしかしたら空中でジャンプとか出来るんじゃね？

そもそもそのレーザーって見切れる速さじゃねーし。

「皆！囲んで！」

……あっ、今人外さんを囲んだらついでに俺も囲まれるじゃん。それでめった撃ちにされて死ぬじゃん。

「ヤベ」

「貴方は逃がしませんよ！」

青い髪の女の腕の直線上に俺が置かれる。そして手の平に軽く光が収束して――

――パシィッ

眼前で金色の髪がフワリと舞う。金色だが看病をしてくれたあの少女ではなく、人外さんだった。……――

「コイツは私の獲物だっ！」

おっと、つい見とれて今のセリフを聞き逃してしまった。一体なんて言ったんだろう。テメーらの血は何色かー、か？

「――弐番より伍番」

彼女は何かを呟いて長すぎる剣の切っ先を地面に向ける。

今例のレーザーが横を一閃したのだが、当たってたらどうするよ？

「――解放！！」

そう叫んで決して軽くなさそうな剣の刀身を余すことなく地面に埋める。……やったこと無いから分からないが、人間はそういうことが出来るものなのか？

途端、地面から一瞬光がほとばしる。

「……」

まさに阿鼻叫喚。彼女を囲もうと走っていた魔法使いが次々に悲鳴を上げる。

原因はおそらく舞い上がる地面に違いない。見ているこっちが呆気にとられて口が塞がらないの程なのだから。

多分半径５０メートルくらいは吹き飛んでいる。視界が目まぐるしく変化し、何がなんだかよく分からない。

「おい、掴まれ」

なんで爆心地は何事も無いんだろうと考えていると、彼女が手を差し出してきた。

どうやら掴まれと言っているらしい。

俺は甘んじてその手を拝借する。

「はっ！」

「ふぉぉおおっ！？」

予想外すぎて声を我慢する暇も無かった。何メートルだろう、と

にかく吐き気を催してもおかしくないくらいじゃないかな？とにかく跳んでいた。

〜〜〜

そのまま逃げて、秘密基地とかに最適そうな洞穴を見つけた。奥行きはそれほど無いが、雨を凌ぐには丁度良いくらいだと思う。雨降ってないけど。

「いやぁ助かった。ありがとうな」

「礼などどうでもいい。ちょっと横になれ」

半ば強引に仰向けにさせられる。
そして彼女は俺の額に手を当てる。
一体なんだ？そういえば助けてくれたときも何か物騒なことを言っていたような――

「――解」

「っ！！！？」

身体の内側から何かが生まれる感覚、いや、何かに飲み込まれる感覚。
突然すぎて心の準備が、とかそういうレベルじゃない。抗えない。抗うという気も起こさせないくらいに強い何か――

「すまない、だがこれで――」

彼女が剣を振り上げる。どうやら俺を殺す気らしい。目が本気だ、助けてくれる雰囲気などどこにもない。

なんか、もうどうでもよくなってきた。この内側から侵食される感覚も、身を任せてしまえばそれほど苦でもない。明らかに身体には悪そうだが……まぁ、いいや。

そんなことより今にも彼女の剣の切っ先が俺の喉を捉え――

「やめたまえ」

驚くほど自然に、その男は悠然とそこに立っていて、恐ろしいくらい自然に、声を発していた。

その声に、彼女は反応する。まるで電池の切れた機械のように動きが止まり、忌ま忌ましそうな表情でその男を視界に留める。

「……しまった……！！」

彼女はやってしまったと言わんばかりに顔をしかめる。

「おやおや、これは面白いものを見つけたな。偉いぞ、よくやった」

「くっ！何をする気だ！」

切っ先を俺から男へ向ける。

今にも飛び掛かりそうな雰囲気だが、男は未だ飄々としている。

「それは今から考えるさ。それより、君もその行為が無駄なことを

早く理解したほうがいい。いや、理解はしているのか。納得したくないだけか？」

彼女がありったけの殺気を込めて男を睨む。だが男はその空気が変わる程の殺気を何でもないように受け流している。

直感的に、コイツはやばいと感じた。

「その前に君だ。そのままだとすぐに乗っ取られてしまうぞ？」

彼女から尋常でない殺気を向けられたまま、俺に注意を向ける。この男は底がしれないな。

「知らねーよ」

「おや、悲哀に満ちた返事だな。死にたくなるようなことでもあったのか？それとも、『それ』が何かを知っていながら、敢えて身体を渡そうとしているのか？」

「……『それ』？」

あー…、そういえば心当たりあった。

黒龍だっけ？確かあの少女がなんか言ってたような？

「どうやら前者か。まぁいい、ここで暴走しても――それはそれで面白くなりそうだが――後々にとっておこうか」

「あン？」

ブラックアウト。

―2―　危険人物（後書き）

……どうにも上手くいきませんねぇ。

―3― 人形（前書き）

やってしまいました…！
二週間そっちのけ…！

―3― 人形

「……」

人外の身体能力を持った女と自然に不自然な男が去ってから、というか俺が気絶してから何時間経ったんだろうか。

ずっと石の床に横になっていたせいか、無性に身体の節々が痛む。

あぁ、それに左腕のボコボコ具合が悪化してやがる。気持ち悪っ。

「あ～、誰が説明求む……」

その声は虚空に霧散した。

ここが何処か分からない（知らない）からどの方向に動けばどうなるのか皆目見当もつかない。

多分ばったりあの魔法使い達と会ったら最期なんだろうけど、自分からそれを望んだりなんかするわけも無く。

「でも動かなかったら餓死る気がする……」

そうか、動いたほうが動かないより死ぬ可能性は低いんじゃないのか？

ただ最近殺されかけまくってるし、魔法使いとばったり会う可能性って高いんじゃなかろうか？

――くい

いやまて、動かなかった場合助かるのは一般人がここに来てくれることだろ？

一般人に見つかるより、あの人殺しどもに見つかる可能性のほうが万倍高いよな、間違いない。

いや、もうちょっとまて。

だからといって動いたとき、町に着く可能性より人殺しどもに会う可能性のほうが高いよな？

間違いなく迷う。いや、既に迷っていると言えなくもないか。

――くい

結論、動いたほうがマシな気がする。後は最近絶望的に悪すぎる自分の運と、多分良いかもしれない悪運に任せるしかないか。

ああ、でももうしばらくはこうして現実味の無いこの状態を保つかな。

緑の匂いとか葉の掠れる音、落ち着いて観察すると中々どうして。これがセラピーというやつか。大発見。

――サッサトキヅケヨ

ん？さっきから後ろに何か――

そこには人形が立っていた。

はたからその人形を見れば誰でもこう言うんじゃないか？動いてる！って。

ただ、真正面から見た俺はまずこう言った。

「人形に殺されるっ！？」

なんと人形は棘の生えた鉄球が先端に付いている鉄の棒、平たくいえば凶器を思いっ切り振りかぶっていた。

「……」

「……」

「いや、また振り上げんでいいから」

「チッ」

「！？」

正に奇想天外。

よもや人形に舌打ちされる日が来るとは。考えたこともなかった。

その人形は長い金髪で顔がよく整っている。小さいのと髪の色と長さからか、どことなく俺を召喚した少女を連想した。

その人形は凶器を空中に霧散させ、ふよふよと宙を浮かんで洞窟の出口に向かう。一体何がしたかったのか、全く分からない。

ついでに凶器が空中に霧散したことについては驚くだけ無駄な気がした。

「ハヤクコイヨ」

「……」

訂正。

一体何がしたいのか、微塵も分からない。

「シニテーノカ？」

「待て待て。行くよ行くから、それをしまえ。早く」

また空中に霧散する。なんだ、ツッコミが欲しいのか？質量保存はどうした？等価交換はどうした？ってツッコミが欲しいのか？だが断る。

とにかく、行動することが出来そうなので少し安心した。
もう面倒だからって餓死するまで寝てたかもしれないし。

〜〜〜

「……」

歩き続けて３０分くらい。やって来たのは一軒の家。森の中に、小屋じゃなくて家。
洋風で、壁は真っ白だ。周りが木々で囲まれているのでどうも場違いに思えてならない。

「……」

人形が無言で見つめてくる。何だ、入れってか？

「……分かったよ」

――ギィ

「……あれ？」

どうせ家の中はおぞましい人形で埋めつくされてたり、そうでなくてもグチャグチャのベチャベチャを想像していたのだが、外見通りまともな家だ。

まともなというか、大分いい家じゃないか？俺に知識は無いけど、素人目にみてもここに住みたいとは思う。

壁は白。玄関装備。入ってすぐにキッチンと階段が見える。階段はどうやら2階にと地下に続くようだ、地下ってあるもんなのか？

「すみませーん。誰かいますかー？」

誰かいるのは確実。まさかこの人形の家なんてふざけたことが無い限りは。

と思っているが、何度呼んでも返事が無い。本当に人形の家じゃないだろうな？

待ってても仕方ないので、とりあえず既にぼろぼろになった靴を脱いで上がり込む。

「……上がってもいいんだよな？」

もう廊下に立っているが、人形に聞いてみた。だが返事は無く、一直線に地下に下りていった。

しばらく突っ立ったまま数分。正直言って足が棒のようだ。それよりも上半身の痛みが酷いのだが、これはすぐにどうにかなるものではない。

「……お」

階段を上がる音。

そして現れたのはウェーブがかかった金髪が肩まで伸びる女性。

同年齢に見えるが……

「ん？珍しいわね、こんなところに人間なんて。……ってあら？」

「？」

「貴方……人間よね？」

「はぁ……まぁ」

「……あ、そ。それならいいわ。で？こんな辺境に何の用？」

「いや…そこの人形に連れてこられて」

彼女の傍でふよふよ浮いている人形を指差しながら言う。

「……成る程ね。それにしても珍妙な格好してるわねぇ、何？死にかけたの？」

彼女が俺の上半身の血の滲んだ包帯から化膿した左腕をしげしげと見る。

確かに異様だとは思う。

「えと、色々とあって……」

目が自然と遠くなる。

本当、色々あったしなぁ……

「すぐに帰るのかしら？よければ紅茶くらいは出すわよ。貴方の身の上話を代金にね」

「帰りたいのは山々なんだけど…短いし、あんまり面白いものじゃないと思うけど、それでもよかったら是非とも」

「あら、帰りたい？」

「出来れば」

「この辺りはよく知っているから、道案内くらいならしてもいいわよ？」

「その辺りは話の中に入れさせてもらうよ、複雑でね。ぶっちゃけいまいち自分でも分かりきってない」

「期待してもいいのかしら？」

「出来れば、期待しないで欲しいかな」

「じゃあ期待する」

「む……」

ここに飛ばされて、やっとまともに話が出来る相手と時間を手に入れた。

ここいらで自分に起きたことを大体は把握しておきたいな……

「あははっ。じゃあ上がりなさい、こっちよ」

「お…お邪魔します」

…人形の横を通ったときに人形が親指を上げてきた。しょうがないから俺も満面の笑みをプラスして返してやった。

なんだか満足げな顔をされた気がする。

―3―　人形（後書き）

むぅ。

でも今週からは忙しくなさそうなのです。

―4―　ゆうしゃ（前書き）

……更新日が全く安定できない……
すみません…

―4―　ゆうしゃ

人形に連れられてやって来た一軒家。
そこの、肩までウェーブがかかった金髪が伸びる彼女に俺がこの世界に来てから今までのことを全て話した。

「へぇ…世の中には不思議なこともあるものねぇ」

右手で顎を掴んで何かを考えている形を作る。別に本当に何かを考えているわけではないだろう。

「全力で他人事だな」

「他人事だもの」

そりゃそうだ。悪いところなんて微塵もない。

「ああでも、貴方の中に黒龍がいるのは間違いないわよ。念のため」

右手で顎を掴んだまま、顔を少し上げてそんなことを言う。
正直実害が無ければどうでもいいのだが、とりあえずそう断言する理由を聞く。

「なんでそんなことが分かるんだ？」

「こう…感覚的に？」

……信憑性は考えなくてもいいか。

その黒龍が俺に在るってことにしよう。何となく。

多分三杯目の紅茶を飲み干す。そういえば腹が減ってるな、何日食べてないんだ？俺。道理で思考が億劫なわけだ。

「でもなんでかしら。龍の意識を抑圧するように魔術が施されているわ、それも最高級の。誰がこんなことを……やっぱり洞窟に現れたっていう男かしら」

「ん？よく分からんが、それって大丈夫なのか？」

「多分ね。それが解かれることはそうそう無いと思うわ」

「ふぅん……ならいいか」

あまり考えず適当に返答する。話はちゃんと聞いてると思うんだけど……まぁいいか。

「ならいいかって……随分とお気楽なのね、貴方」

「や、気楽というかどうでもいいというか」

「自分の命に関わるかもしれないのよ？」

「関わらないことのほうが少ないんじゃないかなーと。ほら例えば、こけた拍子に枝が首を貫通したら死ぬし。」

「斬新な考え方ね……」

「そうかな？」

自分でも俺の考え方は特殊だとは思う。
けど、他人の考えが自分に分かるわけではないから、もしかしたら皆俺みたいな考え方をしてるのかもしれない。

そんなことを考えていると、彼女は話題の方向性を変えてきた。

「まぁ滅多なことが無い限り大丈夫だし、それはいいわ。それはそうとあと一つ、疑問があるんだけど」

「？」

「本当に異世界かしら？この世界は」

「……確かに」

俺がこの世界を異世界だとした理由は、突然見知らぬ場所に来たり、魔法だとか非常識なものが存在しているからだ。
あとはあれだ、先入観。こういう場合は大抵異世界ものだったからなぁ。
つまり、証拠は？と問われたら、瞬間移動と魔法の存在しか無いわけだ。さらにそれらを証拠として不十分であることはそう難しくは無い、と思う。

「もしも異世界だとして、会話って出来るものなのかしら？」

「出来ないに一票」

「はい、これで異世界説は劣勢ね？」

「うーむ……」

彼女が勝ち誇った笑みを浮かべる。

というかまぁ、この会話にはあまり意味が無い。だって情報少ないし。確定するには早すぎる。

だからこれは遊びだ。もっと言えば暇潰し。彼女はただ単にこういう会話、あるいは疑問の提示が好きなんだろう。俺も嫌いじゃない。

「それじゃあ、異世界じゃないならなんだ？こんな魔法とか浮く人形とか俺の居た世界には無かったぞ」

「それはあれでしょ、まだ解明されてない部分が」

「っておい」

「何よ？」

大事なことに気付いた。情報が少ないって言う前にここに情報源が在るじゃないか。そもそも情報交換する前に議論なんて不可能に近い。

ってことで彼女にそのことを伝えると、彼女はサラリと言ってのけた。

「え？そういう遊びじゃないの？」

俺も我ながらこの事態にはそれなりに客観的だなとか思っていた。だがこの女は俺が思っているよりも大分楽観的に見ていた。確かに他人事だけどさぁ。

それでも何となく目線で非難してみると、自信を持って見つめ返

された。慌てて目を逸らす。相手は女だぞ？あ、そこ、小心者とかいうな。ヘタレ？てめぇこのやろう。

「と、にかく！こっちについて色々聞いてもいいか？」

「別にいいけど。その前に一ついいかしら？」

「あん？」

「頭。物凄く揺れてるわよ」

「んぇ？」

バッコン。頭部とテーブルの隙間から衝撃音がこんにちは。その前にまずまぶたが物凄く重い。今倒立したら目がパッチリになるか？……まずい、思考が安定しない。

「出血多量か空腹かそれとも私の魅力に文字通りイチコロか、さぁどれだと思う？」

「前者、とみせかけて中者」

「からの？」

「後者」

「よろしい」

本当に途切れそうな意識を無理矢理つなぎながら、よろよろと右腕を上げて返答する。……きっと後者って言うまで眠らせなかった

だろうなこの女。
彼女はその返事に満足したような表情を作った。
「あぁ、もう寝ていいわよ。おやすみ」
「……おや…す…」
許しを貰ったので、お言葉に甘えて意識を手放す。次に目覚める可能性はいかほどなのかな。
「さて……起きなかったらどうしようかしら……」
彼女は彼のボコボコになった左腕を見ながら失敗したあとの処理について考えてみた。

〜〜〜

「……え？」
これは、何？
私が喚んでしまった彼を取り逃がした後で、今度は彼を喚んだ私の処遇が決まった。
禁じられていた悪魔の召喚。彼などではなく、黒龍を喚んだ気がしたことは伏せておいたが、それでも大罪であることに変わりはない。
ならばと私も覚悟を決めた。あの兵士達に殺されそうになったときは、死ぬのが怖くなって悪魔を喚ぼうとしてしまったが、覚悟し

た上でなら怖くない。
そう、覚悟して処刑に臨んだ。なのに。
「お前達は間違ってる！」
貴方は誰？どうしてここに？葛藤が脳内を支配する。
腰に回した右腕は力強い。私を守ろうとしているこの腕は貴方の腕？
「こんな女の子をよりによって処刑！？ふざけるなよ！簡単に命を殺すな！」
いかにも正義の味方のような振る舞い。見た目は十八くらいだろうか、髪の色は茶。魔法使いなのかそうでないのか分からないが、生身で単身なら、こんなことをするのは余程の馬鹿。
そんなことをして殺されないとでも思っているのか、それとも先日の女剣士の様に化け物じみた実力でもあるの？
「……貴方といい彼女といい…」
私達のリーダー、レイルも立て続けに邪魔者が現れて、うん、あれは大分怒ってる。
レイルはわなわなと怒りに奮えながら右腕を私達に向ける。
「私達の邪魔をするなっ！」
「待て！無用な争いをするつもりはない！」
……は？
レイルはもちろん耳を貸さずに、水の龍を生み出す。

あんな魔法、滅多に使わないはずなんだけど……やっぱり怒ってる。

「くっ！やるしかないのか！？」

彼が私を抱えたまま臨戦体制に入る。

それにしてもこの人の言ってる意味はあまり理解しやすくない。

まるで自分の正義を貫く勇者のようで、それでも何かが違う。

そう、歪んだ、いや、歪みきれなかった勇者のよう。

―4― ゆうしゃ（後書き）

さぁ、始めるよー

―6― 夢（前書き）

更新状況が大変なことに！
どうしてこうなったｏｒｚ

―6― 夢

――『目』

――『足音』

「あぁぁあぁぁぁあぁあぁあぁぁあぁあぁあぁ！！」

俺は耐え切れなくて叫んだ。

叫んだところで状況は好転しない。むしろ精神的に悪化する気がするのだが、仕方ない。これは仕方がない。

走り続けて何分経ったのか、体感的には何時間も走り続けている気もする。

周りは黒。地面と天井の境目が分からない。あるかすらも分からない。ただの黒。

振り向くと紅い目玉二つ。その瞳はこちらを捉えて離さない。その眼光は直視するだけで足が震え、心臓が早鐘を打つ。

真っ暗な前を見ていると嫌でも耳に響く足音。全速力で走り続けているはずなのに、その足音は近づくこともなく、遠ざかることもない。『相手』は歩いているのに。

「落ち着け、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け！！……ふぅーっ」

俺は全速力で長時間走り続けている。ずっと俺の出せる最高速で。何故かは分からないが、ここではいくら叫ぼうが走ろうが恐怖しよ

うが歓喜しようが、全く疲れないのだ。
だから恐怖で足が止まること、それが一番怖い。足が震え、心臓が爆発しそうでも、走ることだけは止めない。絶対に。

「……っ？」

気付いてみれば、真っ黒だった空間に白の成分が混じっている。
黒の絵の具に白の絵の具を混ぜるように、明暗や濃淡じゃなく、白が少しだけ。

――マズイ

「……ははっ」

持ち前の先入観と偏見に基づいて、このまま行けば助かるかもしれないという希望が湧く。
黒が闇で白が光。そうであるなら光は俺を救ってくれる。白は俺を救ってくれる。

『相手』を『白』が、『敵』を『光』が倒す。

――マズイ。これは、マズイ

希望は恐怖を緩和する。希望に目を向けることで恐怖から目を逸らす。それが良いのか悪いのかは分からないが、希望に目を向けずに恐怖を見ても何も変わらない気がする。
走っていると、行く手を遮るように突然黒い壁が現れた。考えるまでもなく俺の邪魔をしようとしているな。けど、ここまで来てゲームオーバーになんてなってたまるか！
黒い壁に向かって走る。気持ち分速度を上げて。壊せなかったら

そのときだ。今は全力で拳を振るうのみ！

「っっっだぁぁぁぁあぁあらぁぁあああぁぁぁあぁぁあああ！！！」

渾身の力を込めた一撃はいとも容易く黒い壁を突き破った。……その壁に既視感。

――マズイ、マズイ、マズイ！

その後も黒い壁は何枚も現れ、その度に破壊して突き進む。そうしていると、空間の色は既に白の割合のほうが大きくなっていた。

もう少しで助かる。きっと助かる。

「あぁ！？もう出て来ないのか！？それともラスボスでもいんのかぁ！？」

声を張り上げるのは何かを誤魔化すため。恐怖、不安、喜び、幸せ、認めたくない何か、それら以外。

ならきっと不安だろう。『白』が『相手』に勝てるかどうか、不安要素はそれだけだ。……それだけのはずだ！

――何かマズイ！

「………な…！？」

おそらくこれが最後。

最後に立ちはだかるのは、あの人形。

武器の一切を持たず、両手を広げて通せん坊のポーズ。
……これはなんだ。物理的でなく精神的に俺の足を止めようとしているのか？

「……」

人形は小さい。だから横を通り抜けようとした。
けれど人形は腕を捕んで強制的に俺の前に立ちはだかる。必然的に俺の足が止まる。
多分、壊せる。この人形は黒い壁より脆い。

「――――っ！！」

足音が近づき、恐怖。
振り返ることはできない。今あの目を直視したら二度と走り出せない。
走り出せと恐怖が訴える。急かす。殴れと。壊して走れと。『相手』が急かす。
拳を振り上げる。
人形は俺の目を凝視し続ける。
恐怖が急かす。

「うぁぁあぁぁあああ！！」

人形を殴り飛ばす。
人形は半壊し。
人形は殴られ飛んだ。
人形は立ち上がる。
人形は立ち上がれる。
人形は壊れていない。

人形を壊せなかった。

――――…………………………分からない

人形の破損、治った左腕、震える両足、早鐘打つ心臓、近づく足音、紅い両の目玉、恐怖の対象、空間の白み、空間の黒み、白、黒、光、闇、『相手』、『俺』、恐怖、混乱する思考、人形の眼光。願望。

「う…うぁ……」

急に浮き彫りになる何か。
虚空をまさぐる思考の手。
何かを掴み、それに縋る。
そう決めたなら、もう迷えない。
これ以上は迷いすぎ。
迷いすぎたら手遅れになる。
迷うな！もうどうにでもなりやがれ！

「うぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおあああああああああああ！！！！」

～～～

目を開けると、天井が見えた。左右に首を回すと、無機質な壁が。
ここはどこだ？

地面には三角形を二つ組み合わせた、所謂六望星が描かれている。なんかおぞましいな。

「……お？」

起き上がろうとすると、腹部に重さがある。見てみると、あの人形だった。うつぶせでビターっとしている。寝てる？

……ああ、そうだった。あの夢は夢だったけど、無視できる夢じゃなかった。ような気がする。だとすればあの人形はこいつで、こいつが俺を助けようとしてくれたのか。

結局あの選択が、俺にとって正しかったのかは分からない。違う選択の先にある未来を知ることはできないからな。

「……ん？」

さらに辺りを見渡すと金髪が見えた。どうやらこっちも同じ態勢でビターっとしている。こんな石の床で寝たら風邪ひくぞ。

どうしようもないので起こすことにする。まず人形をゆっくり掴んで脇に寝かせる。意味はないがうつぶせでビターっと。

そのあとで金髪の彼女の肩に手をかける「うわっ」汗まみれだった。

「……まぁいいか」

疲れてるようだったので起こすのはやめにする。そして何もすることが無いので俺も寝ることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5471l/

龍とダブった！？

2010年10月8日14時10分発行